

# 令和6年度「全国学力・学習状況調査」の結果 —分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

区 名	淀川区
学 校 名	十三小学校
学校長名	庄司 量士

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和6年4月18日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

## 1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## 2 調査内容

### (1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数

### (2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

## 3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・十三小学校では、第6学年 30 名

## 令和6年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語科は、平均正答率が70%で、全国平均を2.8ポイント上回り、無回答率は1.8%だった。内容別では、「情報の扱い方に関する事項」の領域で全国を11.6ポイント上回ったが、「書くこと」の領域では、全国を10ポイント下回った。評価の観点別では、「知識・技能」が全国を6.1ポイント上回ったが、「思考・判断・表現」は全国と同じであった。問題別では、「原因と結果など情報と情報との関係について理解しているかどうかをみる」問題では、全国を18.6ポイント上回ったが、「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる」問題では、全国を14.5ポイント下回った。

算数科は、平均正答率が65%で、全国平均を2.5ポイント上回り、無回答率は0%であった。領域別では、特に「数と計算」と「変化と関係」の領域で全国をそれぞれ10.5ポイント、2.0ポイント上回った。評価の観点別では、「知識・技能」が全国を3.2ポイント上回った。問題別では、特に「加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりすることができるかどうかをみる」問題では、全国を19.3ポイント上回った。しかし、「二次元の表から、条件に合う数を読み取ることができるかどうかをみる」問題では、全国を12.9ポイント下回った。

質問紙では、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」の問いに対する最も肯定的な回答は93.3%で、全国の82.6%を10ポイント以上上回った。しかし、「どちらかといえばあてはまらない」の回答も6.7%あった。

「自分には、よいところがあると思いますか」の問いでは、最も肯定的な回答が80.0%で、全国の42.6%よりも30ポイント以上上回った。

「学校の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることはできていますか」の問いに、肯定的な回答が合わせて93.3%で、全国の81.8%を10ポイント以上上回った。

「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」の問いに対する肯定的な回答は86.7%で、全国の83.6%よりも3ポイント以上上回った。

## 分析から見えてきた成果・課題

## 〔国語〕

内容別における「情報の扱い方に関する事項」の領域では、特に原因と結果など情報との関係について理解しているかどうかをみる内容（知識及び技能）についてよくできていた。ある事象についてどのような原因によって起きたのかを把握し、明らかにすることで、関係を結び付けて捉えることができていると考えられる。

しかし、「書くこと」の領域では、特に図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること（思考・判断・表現）に課題がみられた。今後は自分の考えが伝わるように文章を書くために、図表やグラフなどを用いるなどして書き表し方を工夫することを大切にしていける必要がある。

## 〔算数〕

領域別における「数と計算」の領域では、特に一の位が0の二つの2位数について、乗法の計算や、加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりすること（知識・技能）がよくできていた。具体的な場面において、乗数、被乗数が何十の乗法の計算をすることができるようにすることや、計算の順序についてのきまりや計算に関して成り立つ性質につい

て理解し、計算に習熟したり、計算を工夫したりすることができていると考えられる。  
しかし、「データの活用」領域の二次元の表から、条件に合う数を読み取ること（知識・技能）については課題がみられた。目的に応じてデータを集め、観点を決めて分類整理し、データの特徴や傾向を読み取ることができるようにすることを大切にしていける必要がある。

※全国学力・学習状況調査の結果と実際の学校の状況とを照らし合わせて分析した結果をご記入ください。

※「学力向上支援チーム事業」「各ブロック学力推進事業の実施」等、学力向上に向けた大阪府取組施策との関連を踏まえてご記入ください。

質問調査より

いじめに対する意識には、これまでの日々の取り組みの成果により高まっている。しかし、一部まだ意識が十分でない児童もあり、更なる取り組みの徹底と継続が必要である。

児童の自己有用感や自己肯定感は、コロナ禍が過ぎ、体験的な活動や縦割りでの異学年交流等の活動が実施できるようになったこともあり向上した。

昨年度の課題を受け、道徳教育の研究を中心として、自分の考えを深め、広げたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んできたことで、対話的な学びを軸に、主体的な学びや、深い学びの視点での授業改善がなされた結果、児童の意識にも反映され、一定の成果が得られたと考えられる。

※全国学力・学習状況調査の結果と実際の学校の状況とを照らし合わせて分析した結果をご記入ください。

※「学力向上支援チーム事業」「ブロック化による学校支援事業」等、学力向上に向けた大阪府取組施策との関連を踏まえてご記入ください。

## 今後の取組(アクションプラン)

・他者とのかわりに重点を置いて、学校教育全体を通した道徳教育・人権教育を展開するために、道徳科を研究教科に設定し、学校の全ての教育活動の核として、道徳科学習を充実させ、自他を大切にすることを育み、自他の考えを大切にしようとする意識を高める。

・児童のそれぞれの課題に合わせて体験的な学習の内容を計画し、明確な目標を持つことができるようにすることにより、児童の自己有用感や自己肯定感を高める。

・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立を図りながら、基礎学力の定着やＩＣＴ機器（一人一台学習者用端末等）の活用を進めることで、児童の資質・能力を育成し、自己実現につなげることができるようにする。

・乱立する情報について、データが意図する内容を読み取り、必要な情報が何かを取捨選択し、表現することができる機会をあらゆる学習場面で充実させ、総合的読解力を育む言語活動を展開する。